

資 料

清水安三初期文選（下）

——自叙伝「足洗ふ人」（1923年）——

金 丸 裕 一

は し が き

これまで本誌で発表した「清水安三初期文選」（『立命館経済学』第73巻第3号，2024年11月，及び同第74巻第1号，2025年5月）の最終回は，1923年に雑誌『表現』において管見の限り4回にわたって連載された「足洗ふ人」と題する自叙伝である。周知のごとく清水安三は，戦時期より『姑娘の父母—崇貞ロマンス』（改造社，1939年3月）や『朝陽門外』（朝日新聞社，1939年4月）などの自叙伝を刊行し，自らが北京で経営する崇貞学園への献金を呼び掛けるための一助としていた。戦後に到っても，たとえば『希望を失わず—続朝陽門外』（桜美林学園出版部，1948年9月）や『石ころの生涯—崇貞・桜美林物語』（キリスト新聞社，1977年7月）など，同様の目的を持った刊行物がある。

これらの著書で書かれている内容は，一読すれば誰もが感じられるであろうが非常に面白く，彼の文才が遺憾なく発揮された名作だといえよう。ただし歴史家の立場から精査すると，それらに書かれている内容には異同があり，甚だしい場合では同じタイトルであっても版本によって微妙な出入りが確認できる。要するに，これらを「史料」として利用する際に留意すべき事柄がある事実を雄弁に語っているのだ。なお，近年まとまった『起きろ石ころ』（論創社，2024年11月）は，1965年から1969年にかけて『キリスト新聞』で連載された作品に対して編者たちが緻密な校訂を加えており，同書を一読しても清水による「自伝」が持つ限界について，具体的イメージを抱くことが可能だろう。

以上のような状況を鑑みると，ここで紹介する「足洗ふ人」は極めて重要な意味を持つ。すなわち，まだ三十代前半という年齢で執筆された最も原初的な「自序伝」であり，しかも出来事の発生からそう年月が経過しておらぬ時点での作品である。さらに，大雑把な日付も解読することが可能であり，「崇貞」設立に至る前史がデフォルメが少ないかたちで保全されていると思われるからだ。いずれにせよ，「足洗ふ人」と第三者によって記録された史料，後日の自伝との比較を試みる作業を通じて，わたくしたちはより多角的に初期の清水安三像に迫る道筋が与えられたのである。

最後に，雑誌『表現』について簡単に附記したい。同誌は京都帝大で哲学を学んだ仏教徒である後藤亮一（1888～1949）が編集・発行した雑誌であった。後に臨済宗大学教授や岐阜二区選出

の衆議院議員としても活躍する人物である。そして版元の二松堂書店は、田川大吉郎や山路愛山などクリスチャンとして活躍する知識人の書籍も刊行しており、東京市神田区錦町に本社があった。

1923年1月になると発行所住所には変化が見られないが、名称は「表現社」に変わる。同年7月から「表現社」は神田区宮本町に移転し、9月の関東大震災後も奥付における住所には変化がないものの印刷者は京都・上京の業者となり、さらに臨時事務所として明記される表現社京都局は一條通り衣笠園に置かれる。このメディアにおいても清水安三は重用された感があるも、詳細な分析などは後日に委ねたい。いずれにせよ大正期において、宗教者と文学や報道、延いては世論形成が非常に近い間柄にあったことを示す一事例でもあるだろう。

今回の作業に際しては大谷大学図書館、及び神戸大学社会科学系図書館に所蔵される原本を参照した。関係各位の御配慮に感謝申し上げたい。

以上、簡単ではあるが「はしがき」とする。なお、「清水安三初期文選」（上）～（下）において紹介した史料を用いた清水像については、既に拙稿「清水安三による中国伝道の実証的考察—1913年-1924年—」（『アジア文化研究 国際基督教大学 学報3-A』第51号、2025年3月）にまとめておいた。併せて参照していただければ幸いである。

凡 例

1. 「清水安三初期文選」（下）には、1923年5月から10月にかけて『表現』誌上に連載された初期の自叙伝である「足洗ふ人」を収録した。この年の誕生日を迎えると、清水安三は満32歳を迎える。
2. 冒頭に著者名、タイトル、掲載書誌情報、刊行年月日、掲載ページ数を記した。
3. 原文で用いられる正字（繁体字）は、常用漢字に置換した。また、誤字・誤植や脱字等は訂正せず「ママ」のルビを附し、判読困難な箇所は記号□□を用いて示した。
4. 句読点を補った部分については、括弧〔 〕を用いて明示してある。

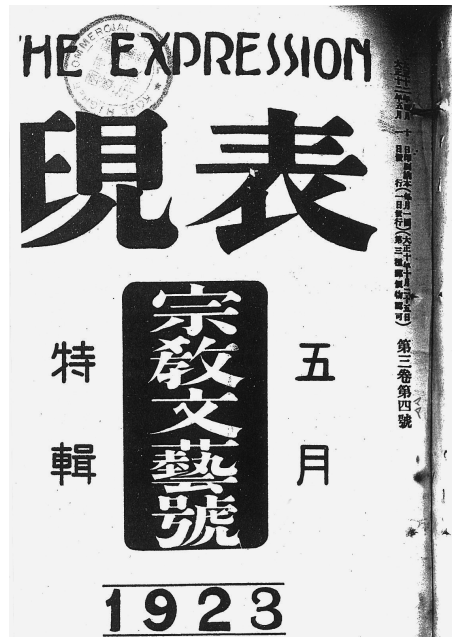
本 文

〈1923年〉32歳

清水安三「足洗ふ人—自叙伝の一節」（『表現』第3巻第4号、1923年5月1日）67～77頁。

予定の退却

読者は多分記憶して居られるでせう。一九一八年から二十年にかけて、北支那直隸〔・〕山東〔・〕山西〔・〕河南〔・〕陝西の五省に、連年の旱災の為め、殆んど無収獲の飢饉が打続いて、日本からも少くなく義捐金が贈られたことを記憶せられませう。そこ頃これといふ仕事もせ



『表現』第3巻第4号、表紙。

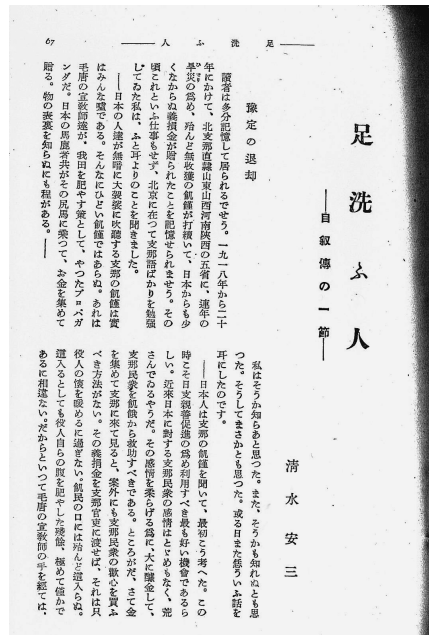
ず、北京に在つて支那語ばかりを勉強してゐた私は、ふと耳よりのことを聞きました。

——日本の人達が無暗に大袈裟に吹聴する支那の飢饉は実はみんな嘘である。そんなにひどい飢饉ではあらぬ。あれは毛唐の宣教師達が、我田を肥やす策として、やつたプロパガンダだ。日本の馬鹿者共がその尻馬に乗つて、お金を集めて居る。物の表裏を知らぬにも程がある。——

私はそうか知らあとと思つた。また、そうかも知れぬとも思つた。そうしてまさかとも思つた。或る日はまた恠ういふ話を耳にしたのです。

——日本人は支那の飢饉を聞いて、最初こう考へた。この時こそ日支親善促進の爲め利用すべき最も好い機会であるらしい。近來日本に対する支那民衆の感情はとゞめもなく、荒さんでゐるやうだ。その感情を柔らげる為に、大に醸金して、支那民衆を飢饉から救助すべきである。ところがだ、さて金を集めて支那に来て見ると、案外にも支那民衆の歓心を買ふべき方法がない。その義捐金を支那官吏に渡せば、それは只役人の懷を暖めるに過ぎない。飢民の口には殆んど這入らぬ。這入るとしても役人自らの腹を肥やした残余、極めて僅かであるに相違ない。だからといつて毛唐の宣教師の手を経ては、我等日本人の志が、支那民衆に知られるかどうか甚だ疑問である。毛唐の手を経れば、毛唐から貰つたと思ふに相違ない、これでは何んにもならぬ。このことをわきまえずして矢鱈にお金を集めるのは、馬鹿の骨頂だ。一層のこと、支那飢饉宣伝説を言ひふらそうではないか。それぞれそれが何よりも名案だ。こういう場合こそ軍閥の情報部にこのことをやらせるに限る。——

世の中には裏に裏、底に底があるわいと思ひました。それは一九二〇年十二月十六日の朝でした。それは東京の吉野作造先生から着いた葉書を読んだ折でした。——支那の飢饉をうそだと言ふ人がありますが、どちらが本当ですか——とか何とか、確か葉書の隅処に書いてありました。その日私は自ら飢饉地を旅して、実地踏査して来ようか知らあと考へて見ました。考附いたのは



『表現』第3巻第4号、67頁。

朝でしたが、もうその日の暮は行くことに決め込んでゐました。こゝでちょっと、私達家庭の私事を書かねばならぬ。

その頃私達夫婦は、支那電信局技師を勤めてゐらつしやる池原作三郎さんといふ方の二階に間借りしてゐました。間借といふべきではなく食客をしてゐたのです。私はその相住居の生活に何の不服もなかつた。只一つ夫婦喧嘩が下へ洩れはせぬか、若しか洩れたらどんなにか、蔑まれるであらうと思つて大に悩んだものである。この私の心配はワイフに取つては、大層有利であつた。彼女は私が大声をあげて叱らないことをよいことにしいしいゐた。

——だらしがない、もそつと部屋を整頓しないか。——

蚊の鳴くやうな声で、たしなめたからとて、彼女の耳には這入るものではない、彼女は結婚してからこの方已に二年あまり、私といふ夫によく統御せられ、指導せられ、感化せられてゐた。そうして世の中の最も平凡なる所謂従順なる妻であつた。然るにこの二階にゐそうろうし始めてから、私の威勢が頓と損はれて仕舞ふた上に、ワイフはかなり自由な人間に生れ更つた。

——あたしが掃除役、あなたが散らけ役、そんな身勝手な法則を誰が拵えた。馬鹿々々しい。だらしのないのはあなたでさあね——

ヒステリックなきいな声を張挙げられちやもう、下の池原さんのお座敷へ筒抜けである。

——大きい声をするものではない。直ぐと下に聞えるぢやないの。馬鹿。——

——聞えたつていゝぢやありませんか。あたし行つて聞いて貰ふ——

かゝる時に私は、ぼつぼつ自ら部屋の整頓をするのである。そうするより外に、ワイフの声を池原さんに聞えなくする方便はないのでした。ワイフもそのことをよいことにして、何か気に喰はぬことがあると、わざと声を大きくしたやうです。大きい声、それが彼女の夫と戦ふ唯一の武器でありました。

飢饉地旅行を実行する為に、私は一つの困難を感じました。それは他ではない、ワイフをしてその旅行を実行すべく賛成せしめねばならぬ。……読者の多くの方々には、何んだ馬鹿々々しと思はれるぶ違ひは、けれどもその頃の私は、実際そう思つたのです。断つて置くが私は、養子でもない、ワイフの持参金に依つて食つてゐるものではない、ワイフにまゐつてゐるお目出度い男でもない、只下の池原さんにワイフのヒステリックな声を聞かせともなく思ふばかりなのである。私はそつとワイフの気を引いて見ました。

——だうだ、俺は一つ飢饉地を実地見て来やうか知らあと思ふんだが——

この言葉を発する時には、もう私の心は決まつてゐました。けれども先づ静かなる言葉で、相談するかのやうに、探りを入れて見たのである。

——馬鹿、おつしやい。物好きな、第一旅費のお金もゐる。飢饉地には伝染病が猖獗しててよ……それから土匪もゐるそうですもの——

ワイフは即坐に答へた。私もその通りだと思つた。

——でも、俺はもう行くことに決めているんだぜ——

勝手にしたらいい。無責任な、この普通でない（彼女は妊娠してゐた）あたしを置いてきぼりにして、どこなへりで行くがいい。そうして死んぢまへ——

暫く黙つてゐた彼女は、これ丈けの言葉を吐出すやうに喋つた。

——もうよい、もうよい、どうかそんな大きい声をして呉れるな——

もう駄目だと私は思ひました。一年間の相住居。食客の生活は自分のホームを壊して仕舞ふた。ワイフの人格を壊して仕舞ふた。一層この家を出て家庭の建直しをしようかとも考へた。しかし一戸を構へるには生活費が余りに乏しかつた。その頃私は月額百円也の仕送りを、ある特志者から受けてゐたのであるが、当時金百円の為替相場は銀三十何円にしか相当しなかつた、三十円で到底一戸を構へられそうもなかつた。

——俺は矢張行つて見る。支那の田舎を見る好いチャンスでもあるから——

私は一時間程もたつてから、もう一度いつて見ました。はれものに触れるやうに、いつて見たのです。

——まだ言つてゐる。どこにそんな余計なお金があります。零度下何十度といふ寒い所で、女房に外套一枚買つてやれないやうな意気地無しの男が、旅行をする、よくも言えたものだ。面白いことでもあるといふならまだしものこと、飢饉を見に行く物数奇がどこにあらう。そんなお金があつたら、ゴム草履の一双でも買つてお呉れ——

ワイフの奴もう泣いてやがる。その下卑た言葉がてつきり下の池原さんまで聞えてるに違ひない。雷のやうにわめいてゐると言つてらつしやるであらう。——そう思ふと私は穴あらば這入りたくなりました。ワイフの愚を知られる、それは止むを得ぬ。けれどもワイフをすら感化、善導出来ないやうな自分の人格を、他人に見破られたくない。実のところ私はワイフの愚を人々に知らせたかつた。そしてこのワイフをすら、受容れてゐる自分の忍耐を称揚して貰ひたく思つた。けれどもそれと同時に自分に人を感化する丈けの徳が無いことを看破せられたくなかつた。

その夜はいつもよりも、早く床に入つた。そうして飢饉地旅行のことと、家庭の改革に関して考へ込んだ。夫から威圧を受けないから、放縦になるのであるにもせよ、ワイフに対して威厳と腕力を用ゐないことは、よいことだと思へる。

私はこうも思つて見ました。夫婦有別とあるから、男女同権は東洋の女には不向であるのかも知れぬ、矢張馬を御するには、轡と鞭を要する如く、再び彼女の為に、威力を示した方がよいのかもれぬ。

しかし、成るべくならば、小細工を用ゐずして、自由自治の女になつて貰ひたいものだ。大体、自分の動機が悪い。下の池原さんに夫婦の小競合を見られたくない為に、自分はワイフを威脅せなかつたのである。動機が悪るい、今度は心から女の権利を認めて、自由を尊んで見るとせう。それでも夫を侮辱するならば、その時のことにしたらよい、うとうとしてゐる裡に眠に落ちました。

あくる日の朝、私はもう一度、ワイフを説きつけるべく努力して見ました。

——西洋の宣教師達は、西藏の奥地にまで、踏み入るとして文明開発の為に働いてゐる、この間もヘレン夫人といふのが北京に来て、YMCAで話してゐたよ、何でも二十年程前に、ヘレン夫妻は倫敦ミツシヨンから遣られて、西藏に行つたのだと。彼達は沢山の薬を携へて、夫は産婆の仕事まで習つて出掛けたとき、産婆の仕事を何で習つて置いたつてか、それは夫人がお産をしても、そこら界限には医師も産婆もないからだらうよ、ところがだ今年の春、その夫がふとした思ひ附で、西藏人のボーイを家の中に入れて寝たそうだと、十何年もつかつてゐたボーイであるから、大丈夫と思つて同じ屋根下に寝かせたのだ。とするとこの初夏のある夜そのボーイの為に夫は、惨殺されてしまつたと。ヘレン夫人は今北京で痼疾を癒治してゐるのだそうだが、また再び西藏に行くといつてゐた。どうだお前だつたらそんな所には二度と再び行くまいね——

私は詢々と説いたつもりでしたが、ワイフは聞いてゐるやうな、聞いてゐないやうな表情であつた。

——どうせ人間には冒険があるべきだ、俺は行く。西藏へ行くことを思つたら、飢饉観察は何でもない。——

——また出た、さつきからいつて居たことは、あたしを説き伏せやうといふ仕組だつたのだなあ、あなたはよくも執拗に言えますね。考へてごらん。——

ワイフはもう泣声である。

——勝手になさい。家一戸構へることの出来ないやうな意気地なしの癖に、もうあたしは知らん……馬鹿野郎。——

私は無論ぶん擲つてやらうかと思ひました。けれども只思つただけで、漸くのことで踏止つて、手出しはせなかつた。退却々々——私はこういつて、外へ出て行きました。外は身を切るやうな風が、吹いてゐました。

その日はどつぶり暮れてから家に歸つたのですが、ワイフは馬鹿ににこにこして私を迎へるではありませんか、私は全く面食はされました。その頃私にとつて、何よりももの欣びはワイフがにこにこしてゐて呉れることだつた。

——やつと出来ましたのよ、大騒ぎして——

ワイフの見てる方向に目を落した時に、私はベツトの上に旅行具の凡てを見出しました。毛布が皮紐で縛つてある、毛皮の帽子もころんでる、そうしてバスケットにはパンが一ぱいに詰つてゐました。

——これは何だい、ごりごりしてゐるではないか——

私はほくほくるす自分の欣びの情を、堰止めて、成るべくへん何だ——といったやうな態度を装つてゐたのです。そうしててれ隠しの為に何か知らあいつて見たかつた。

——これは銀貨だぞ。——

それはワイフが木綿胴^マの巻銀^マに貨をならべて、一つ一つをミシンで縫着けて置いたのです。

——そうして置けば、入用毎に一つ一つをナイフで拔出することが出来るの——

甘い声をつかつてゐる。馬鹿野郎を叫ぶ口からも時々、こうした暖い言葉も出るのである。

——これはピストルではないか——

——えい下からお借りしたの。万一の為に——

——まさか人間を殺すことは能きまい。殺されても殺したかあないねえ……僕はまだ人を殺す用意をしたことはなかつた——

毛布に包れてるピストルを見着けた私は、溜息をついてゐた、これもまたどうせ、私の身の危険を思ふ余に考出したことだと思ふと、涙含したくなつて来た、しかしそれと同時に、曾ても屢々感じたのであるが、一種の寂寞を身に沁みて感じました。同棲已に三年余、未だ猶夫の心持が理解できぬ女よ！ 私は寧ろ可憐に思はざるを得ませんでした。これでは貧乏が苦になるのも無理はないことでありはする、私の読んでゐる書物のどれか一冊でも、見て呉れるならば、ピストル等を用意する気にはなれない筈だ。高等教育までも受けた女ではないか。

私はピストルをいちぢり乍ら、考込んでゐました。考へてゐるうちに、腹立たしうもなつて来ました。

——何考へていらつしやるのよう、パパさま——

私はふつと腹立たしい心持から救出された、そうしてもう一度、柔らいだ心持に甦つた、彼女は私のことを、パパさまといふ、その実子供はまだ胎に居つたのである、彼女がパパさまといふ時は、余程機嫌のいい時だつた。私はこの言葉を聞く度に甘い心持に触れるのです。

——パパさま、成るべく冒険は止して頂戴、後生だから——

私は彼女の首を抱いた、彼女は私の胸に頬を埋めて、泣きぢやくつてゐました、その夜はびつたりと抱合つて眠つたのです。

一枚の衣で五人の暮らし

それは暮おしづまつた十二月十七日であつた。私は北京を立つて飢饉地に向ひました。京漢鐵路——北京から漢口に至る鐵道に沿ふ直隸平野を視察してから、瀧海鐵道に沿ふて河南、陝西を旅行したのです。歸路は津浦鐵路——浦口から天津に至る鐵道に依つて、山東の飢饉を見て歸りました。之れに要したる日数は約一ヶ月でありました、私は今その旅行談を語らうとは、毫頭思ひません。只、二つ三つの村のスケッチを試みて、人間の痛ましい経験を考へて見やうと思ふのみです。先づ私は易県で、一夜の宿を求めた百姓の家の話から始めませう。

易水——あの易水寒しの詩で、誰もが知つてゐる——の畔に、五家莊いふ村がありました。易県の城から日本里の八七里もありましたらうか、易県を朝立つて、幌馬車にがたごと揺られて、やつとこの村に着いたのは、もう彼は六時過ぎでしたらう、易水から身を切るやうな風が、びゅびゅ吹いて来ました。

私の乗つて来た幌馬車は、ちょうどあの日本でいふ御所車の様な恰巧^{マツマツ}をしてゐた、無論そう立派なものであらう筈がありません。只のボロ馬車に過ぎません、慣れぬ者がこの幌馬車に乗る時は、本当に苦します、あの道路だか、川だか、解らぬ田舎道を、がたびしや揺られやうものなら、頭を幌の格子にぶつつける、尻が堪らなく痛くなり、嘔吐を催す、目暈はする、それはそれは苦しいものです。

——私としたことが何を苦しんで、こういふ田舎道をさまようて——

冬の日はまだ既に、暮れやうとしてゐる。私は心細くなつて来ました。

——おゝい、馬車屋、俺はもうこゝで泊るとせう、この村には宿があるかい。——

——こんな小つぽけな村に、宿などがあるものですか——

——なければ百姓の家で沢山だ——

——百姓の家ならあるやうですがね——

——宿まではまだ余程あるかい——

——そうですね、もう五支里もありませうか。——

——ぢやこうしたらどう。お前さんはその宿まで行く、俺はこの村で宿まる、明日の朝、俺を迎へに来てお呉れ、明日は易県に引返へすつもりかつてか、勿論そのつもりでゐる——

馬車屋や道傍の百姓家を、二三軒当たつて見てるらしい、寒くはあり、暗くはなるし、もう何処でも構はん、泊り込んでやらうと思ひました。

私は幌馬車に積んで来た劈柴——薪——と、それから石油を持つて、その百姓家に行きました。幌馬車の音が、村の端に消え行く頃、驢馬の憐れな鳴声がくうくう聞える。やつぱり馬車屋と一緒に行けばよかつたと思はぬでもなかつた。これまたどうしたことだか、私が泊るといふに、子供だけしか起きて来ない、家の中は真暗なのである、奥には家族の声がしてゐる。みんな蒲団にくるまつてゐるらしい。私はもう癪に触つてゐました。

——おい坊、お前のうちはみんな病氣なのかい。——

——いゝや——

——ランプを点さないのかい、このうちは——

——……——

私は自分の持つて来た豆ランプをつけて、先ず劈柴を焚き出しました。

——お母、ランプに火を見るのも、久しいことだのい——

——ほんとにそうだ、盆からこつち一ぺんも点さなかつたのい——

娘と母親の声らしい。今し方子供に問ふた自分の言葉をすまなく思ひました。こうと知れば——ランプを点さないのか等と問へた義理ではなかつた。劈柴がぼうぼう音立てゝ燃え出した時に、私はバスケットからパンを取出して、むしやくしやり出しました。

——お坊、お前さんの家は何人暮しだい——

——わしも混ぜて五人——

——そうか、お母とお父と、妹とそれから——

——それからお婆——

——お前はことし幾つになつたんだい——

——お母、わしは幾つかい、十四か——

子供は大声をはりあげて、母親に自分の歳を問ふのでした。

——お前は自分の年を忘れたのかい、随分呑気ぢや——

——そうそう十五だつた。——

子供はパンをちつと見つめてゐる。

——坊、パンを一つ食つたらどう——

十五の先生食つたも食つた、牛が物食ふ如うに食つた。

——兄さんぬくい、あしもあたらせておくれよ——

奥の方から妹の声がしました。

——いらつしやい、来てもようござんすよ——

兄に代つて私が答へてやりました。兄の子供もなかなか行きそうにもない、妹もやつて来ない。私はどうしたのかと思つてゐました。

——兄さんわしの番ぢやよ——

兄が洩々這入つて行つた時、奥から何かした囁がひそひそ聞えた。そうして間もなく妹がやつて来ました。妹はよく田舎娘にある低い鼻の平らべつたい顔の持主でありました。そうして今し方兄の着てゐた黒っぽい着物を纏ふてゐる、ぷくぷくして狼に衣のやうである、私はどうしたのかと思ひました。

——姑娘——むすめ——お前さんはことし十二？——

——おぢさんは良く知つとるのい。兄がいんひょつたんだ。そうにきまつてらあ——

——お前もパンをおたべよ、兄さんは旨いといつたよ——

姑娘は待つてゐたといはむばかりに、私がこういふと直ぐ喰ひ始めました。姑娘の喉首が今にもつぎれそうに思はれぬ程に、細くやせこけてゐるのです。

——陳子——娘の名であらう——お婆にもあたらせてお上げよ——

娘に入り替つて、皺くやの婆がやつて来ました、黄ばんだ白髪を蓬々生やしてる、でも正直ない、婆さんらしい、この人も黒っぽい着物を着てる、孫たちの着物と同じだ。私はこの時やつとこの家には、一枚の着物しか無いことを氣着きました。皆で一緒に出て来られないのである。

青ばんだ血管が蚯蚓のやうに、うねうねしてる手を出して火にあぶつてゐる。

——老太々——ばあさん——お前さんはこん年のやうな飢饉に出喰したことはありましたかい。

——はい時々ありましたわい。陳子位の歳に一つぺんと、四十幾つの時に一ぺんとありましたわい、けれどもことし程にや、ひどいことはなかつたと思ひますわな。へえ——

一体この辺のところは、日本でいへばどうしても上方の田舎だ。道が中原に近い丈けに言葉が柔らかいやうです。

——そんなに何度も飢饉に出会はずならば、何とか方法を考出して、井戸を掘るとかしたらよいぢやありませんか——

——井戸を掘れば、そら水は出て来ます。けれども早魃でない年でも、水を汲まねば井戸は枯れて仕舞ひほす、それが阿呆らしいよつてなあ、誰も掘りませんわい、それよりも雨乞が第一ですわ。——

——雨乞といふと——

——太鼓を打つて、松火を焚いて、泣いて叫ぶのですがな、矢張——

——今年は雨乞をせなかつたのですな——

——いゝえ、どの位一生懸命にやりましたか、やりましたけれど、雨が降つて呉れませんでしたかな——

——そらまたどうしてでせう——

——やつぱりあの、人間のまごころが届かないのどすなあ

人間が自然を征服しやうとせずして、自然を擬人的に考へて、自然に祈願しやうとする人達をこゝにも見出した。そうして凡ての不幸を自らの罪に帰せやうとする人達をこゝにも見出した。ワイフの我儘をすら、自分の徳の足らぬが為と考へてゐる私は、この婆さんと五十歩百歩であると思ひました。

お婆さんが去つて、間もなくおふくろがやつて来ました。前歯二つが馬鹿に大きい為に、上唇が不恰打に高まつてゐる。左のこめかみに大い黒子がある、ひどくやせてゐる、頬がこけて頬骨がとび出てる。でも朴訥な女のやうでした。

——パンは如何、みなさん食べましたよ——

——お婆が喜ばはつてなあ——

聲でない私に、無鉄砲な大声を張上げて喋る。これなら一町位離れて話合つても大丈夫聞える。とても叶はぬ。耳がわんわんいふ。田舎者は之だから困る。

——私は聲ではないから、小さい声で話してお呉れ、頼む、おかみさん、お前さんとは、何から売り放したかい——

——そうなあ、いらんものからいらんものから売りました。二つあるものは一つ、農具はそれでも売れません。そいつを売ると百姓は出来ません依つて——

——あゝ、そうか。今何がある。何と何だけが残とるな——

——はゝゝ、そんなことを聞くもんぢやありますまい、今ぢや蒲団と、着物一枚だけ残つてますよ。どうしても一枚の着物がなければ、村の粥廠——その頃も羅には施粥場が設けられてゐた——へお粥をとりに行かんらんものなあ——

——よくそれでも農具を手放さなかつたね——

——実は衙門——おかみが売らさないんでしてな——

私の聞いたところによると、彼等は毎日粥廠から三合ばかりの粟の粥を貰つて、それで露命をつないでゐる。而も粥は道でしつかり凍つてひえ切つてゐる。それを日向に置いて熔けるのを待つてするのだそうだ、おふくろもパンをかなり猛烈に食つた。そして私のバスケットは僅にあと一斤を余してゐました。これ丈けあれば一週間は大丈夫と思つた兵糧が一夜にして尽きて仕舞ひました。おふくろが去つてから、私は毛布にくるまつて眠りました。シャツ、オーバーセツタ、洋服外套の上から所謂着のみ着のまゝ毛布に包れて、眠つたのでした。にも拘らず、明け近くなつて、火も消え、寒冷も加はり、脊のあたりがずきずきうずく。一枚の蒲団にくるまつて眠る五人の家族は、どんなにか寒いだらう。私はぢつとして居れぬやうな心持になりました。明日はこの毛布を呉れてやらう。この毛布を置土産にしやうか知らあ。でも、これを持つて帰らなかつたら、どんなにワイフがわめくであらう。我家にだつて毛布らしい毛布は之ぎりである。やつぱ止めやうか。でも我家には充分に蒲団も与へられてる。うとうと夢みる心持で考へてゐました。

七時ころ、馬車が家の近くに止つたと思つてと、それは私の幌馬車でありました。私は四人が待つてゐるところに近いで、見知らぬ者を泊めて呉れたことを謝しました。そうしてランプだの石油を残して置いた上に、例の毛布を呉れてやりました。十四円出して買った毛布である、これを買つた時に、ワイフは毛布一枚は蒲団二枚の温みがあるといつて喜んだものである。北京に帰つた時に、ワイフの怒る情態が目映るやうである。けれども思切つてやつちやつた。ところが彼等はにつこりした丈けで、有難うとも言つて呉れぬ、私としては丸袴でもいゝんだ、はね起きて感極つて有難うといつて欲しいのでありました。実いふと。

そこが支那人である。嬉しく思つても、感謝してゐても、それを容易に表情するものではない、色に表はさぬのは喜怒哀楽ばかりではない、感謝の心持ちもちよつとやそつとでは出て来ないやうである。それでも私は何んだか、拍子抜けしたやうな心持がしてならなかつた。

幌馬車に乗つてから後も、頭の中は毛布の問題で一ぱいでありました。そうして何だか吝しい気もした、色々考へたが結極こうであつた。これは世の善男善女が、びんずる様に賽銭をあげたり、涎かけを進上したりするのと同じではあるまいか、びんずる様は木像であるから、サンキューとも謝々とも、有難うとも何ともいはない。けれどもそれは実はその木像に献げたものではないんだ、びんずる様いふ神仏にさゝげたのだ、そうだ、そう思ふことにする、丁度今日はクリスマスである。これを今年のクリスマスプレゼントとせう。また——馬鹿はそうとでも思ひたいんだらう、毛布一枚が何んだ、馬鹿——とも独語して見ました。

夕暮易県に着きました。

清水安三「足洗ふ人」(『表現』第3巻第5号, 1923年6月1日) 90~101頁。

村の慈善家

北京を夜十一時に発する汽車は、あくる朝三時半保定〔、〕六時半正定、七時石家莊、八時順徳、午後四時彰徳、十時鄭州といふ順序に停るのですが、私はこれらの町々に下車してこの附近の村々を訪れました。彰徳から新郷の中間に湯陰といふ田舎町があります、私がこの町にある岳飛の古蹟に心惹れて、下車したのは、冬の日の傾く頃でした。

北支那に稀れな水分の多い雪が、ビシヨビシヨ降つてゐる。

——この町に宿があるか知らあ、無ければ岳飛の廟に泊り込むとせう——

こうも眩き乍ら、何となく心細くなりました。幌馬車を急がせて、日の中に岳飛の古蹟を訪ね、水師の表碑を見ました、廟から程遠からぬところに、小さい陋いものではあるが、ちよつとした宿屋がありました、でも足を延ばしてゆつくり眠れました。

翌日は湯陰県から北方何十支里にあたる武家坡といふ村に出かけました、この村を目指した、訳は全くのこと気まぐれでした。

——武家坡！

宿でこのあたりの旱災模様を聞いた時に、ふとこの村名を聞いたのです——何だか聞いたやうな名だ——何べんか繰返してる裡に、それが支那の戯曲に出て来る名であることが思浮べられました、やつと思出した時に、——へん、何んだ——極くつまらなく感じられた、それは本当に飢

饞調査に旅してる私には、心持ちに於いて、ふさわしからぬものであつたのです、でも幌馬車から、何処に向ふのですかと問はれた時に、別に何処といつて目当てすべき地名が頭になかつたものですから、兎も角、武家坡に——と吩咐けたのです。

幌馬車の中で、武家坡の筋書をそれから、それへと想出でてことによつたら、この村であつたローマンスぢやないか知らあ——等と思つたりしました、戯曲の筋はこうであつた、

——都で永い間学問してゐた青年が、やつと試験に及第して郷里この村へ帰つて来た。村のはづれに川が流れてる。川辺に一人の女が黒ばい質素な衣を纏ふて、草花を摘んでゐる。見れば村を出る頃親の定めた約婚の女である。

「若しや姐さん、お前さんは××ではないですか、」

「あなたは見るところ、都から下られた人のやう……若しか××にはお逢ひではなかつたでせうか……」

女は幾年もの間たよりの無い、婚約の男の名を、羞かみ乍ら口にした

「××ならば遠い昔に……学も半途に……逝つてしまつた。」

男は無造作に語つた。

「……」

「お驚きになるのも、お嘆きになるのも無理はない……」

「……」

「だが、彼は今はの際にいひました、君は武家坡の村を訪れることがあるならば、家に待つ約婚の彼女に、心残しつゝ逝つたと、どうか一言伝えて呉れ」

「……」

女はあまりの驚きに、呆然としてゐる。

「実は私はまだ妻なきもの、若しも御身許るし給はゞ、友に代つて應めもせう」

女はこの時、男をきつと睨んでこの無礼なる男と、ありきりの言葉で罵つた、彼女が狂はむばかりに苦しんでるのを見るに耐えずして、

「死んだといふは真赤な嘘この私こそ御身の待ちし人、凡ては御身を試みむとて……」

女は悲みの底から喜びの頂に飛上げられた。これが武家坡のあらましです。

私としたことが飢饞地を見舞ふ旅人らしくもなく、こうした戯曲物語を、思浮べ乍ら馬車に乗つてゐるのです、——あれが武家坡の村でさあね——

馬車屋の声におどろいて、首を幌の外に突出して見ると、小さい村が見える、成程川らしいものが村はづれに、うねつてゐる、私は愈々戯曲の武家坡に決め込んで仕舞ひました。きのふ降つた雪が、屋根に残つてゐる、それがちかちか輝いてゐる、枯れた柳が高く低く見える、間もなく村に着きました。

この村に近い、先づ驚いたことは、この村に犬の声が聞えることです、支那の田舎を旅行する時に、一番厭な思ひをさせられるのが、犬の声であります、幾十といふ犬が、時には幾百といふ犬の群が、村に入るから出るまで吠える、誰だつていゝ心持ちがしないのである、ところが今度の旅行は、一度も犬に悩まれたことがありません、村々は犬を養ふ丈けの余裕を持つて居らないのです、そういふことが間違であるならば、こういつたらいゝかと思ひます、村々には犬の住む余地がないのである——と、只ところどころで、狼のやうに瘠せこけた犬が、あばら骨の一

枚々々を見せて、歩るいてるのを見受けたのみでした。

この村に来て、犬が吠えるのを久振に聞いて、何となく壮快を感じました、一犬虚に吠えて、万犬実を伝ふといふ言葉は、支那の田舎を旅して最もよく實際能きるやうです、武家坡の村中の犬が、私の幌馬車に向つて、吠えつきました。いつもならば犬をにくらしく思ふのですが、この日は何となく壮快に感ぜられました、今年はどの村もどの村も、しいんとして犬の消えたやうな気分が満ちてる、にも拘らずこの村だけは何となく景気がよさそうである。

——この村の犬はふとつてゐる、まるまるしてゐる。……おやこの村には鶏も居るぞ……——

鶏の鳴く声を聞いた時は、実に嬉しかつた、長い間村で鶏を聞けなかつたのです、野に生物を見ず——といひますが、今年の村々には犬も豚も鶏も、無論牛馬も稀にしか見ません、ところがこの村には凡てが生きてゐる。

——この村は旱魃が軽るかつたんだらう——

私はこう思ひました、しかし訊いて見るとこの三年よい時で二分作、わるい年は無収であつたそうである、村は二百戸もあるでせう。さつき小さく見えたがかなり大きい村である。村には戸を閉めて、避難に出かけてるものがない、私は益々不思議に思はずには居られませんでした。

幌馬車を湯陰に返へして、私はこの村に泊ることにしました、村には幾つかの驢馬もゐるらしい、帰路はどうにかならう、私の泊めて貰つたのは、この村の財主——お金持の家でした、武家坡はどの家もどの家も、小つぽけな、しみたれた百姓家ばかりでしたが、この家丈けは実に立派でした、武家坡の劉家といえはこの界限で通つてゐる名ですと、家のぐるりは三十尺もあらうか、高い壁で囲れてゐる、高壁の外には深い幅広い溝が、取巻いて掘られてゐる、門は馬鹿に大きい。

門の中には広場があつてからつとしてゐる、門の傍にはもう一つ美しい赤門が小さく、小ぢんまりと立つてゐる。この赤門の中にゴタゴタと家が建てられてゐる、で見方に依つては高壁が二重に取巻いてゐるやうにも考へられる、広場は秋のとりいれの時には、稲だの草だのが乾される為に用ゐられるのだと、私は赤門を入つて直ぐ右側の一間に泊められました、私の部屋は西向の寒い部屋でした。部屋から大門が見える、門の屋根には展望哨が立つてゐる、門房には古びた鉄砲が三四十挺無造作に掛けてある。夕飯には卵の煮堅めたのを二つ三つと、小豆の粥を持つて来て呉れました。水つぽい粥をたらふく喰つて、寝そべつてゐましたら、村の先生が話相手に来て呉れました。

——貴姓——お名前は、貴姓——お国は、貴庚——お年は……——

先生は一通り挨拶を、支那式に済ませて、私の村へ北目的を問ひました、——

——湯陰の岳飛の廟に詣でた序に、この附近の飢饉の情況を知りたく存じまして——

私は武家坡といふ戯曲の名につられて来たことを、ふと口の先まで持出して、はつとしました、それは武家坡の戯曲をどうのこうのと思つたのでなくつて、こん度の旅行の心持は全く遠い想出でに耽つた自らを恥ぢてゐたからです、

——あゝ、そうですか、岳飛は東洋——日本にまで聞えて居りますかねえ……——

先生は凹んだめをしょぼしょぼさせてゐる、鼻の高くない反つて顎骨の突出した四十男でありました。

先生は村の教員である丈けに、北京の言葉がよくわかる、私はそれが何よりもの嬉さでありました、色ろんな質問をあげせかけました、——この村で、一番のお金持は——

——この劉家です、劉家に及ぶものはありません——

——村はなかなかお金持が多いやうですね、こうした飢饉にも少しも、困らないで——いや、この劉家の外には、一文だつて、お金のある家はないんです——

先生から聞くとおのころに依るとこの村には、土地を所有してゐるものが、一人もゐない、凡てはこの劉家の作人である、この家は古旧家で、この村の凡ての土地を財産としてゐるのだそうです。

——村の者は一人も残さず劉家のお蔭で食つてゐるのです。劉家に恵まれてゐるのです——劉家が村民を養つてでもゐるのですか、——先生はその質問、待つて居ましたといったやうな風に話出しました。——では詳しいお話をいたしませう。ある秋の暮、私の教子の中にこういふ恥ずべき事件が起りました、田景奎といふ子供の家は村での貧しい家ですがね、彼の家はこの二三年といふもの、収穫の凡てを残らず劉家に納めても、年貢の十分の一にも達しませんでした、一粒も残さず劉家のへ納て後、親子四人のものが草の葉だの根だのを食つてゐました。えい、何んですと、年貢を納めねばいゝにつてですか、怎ういたしまして、めつとうもない、年貢を納めないで、この村に居られませうか。

ある日田景奎、ことし十二歳ですがね、それが鶏の餌を盗んだのです、——

思はず私はどもり乍ら訊きました、

——鶏を盗みましたつて?!——

——いゝえ、鶏を盗んだのならばまだしもいゝのですが、実は劉家の門の傍にある鶏の家にもぐり込んで、餌米をむしやむしや喰つたのだそうです、そこで食つた丈けならば兎も角一攫二攫持つて歸つてそつと食つたのですと。——

村の先生は如何にも憤慨してゐました、青い血管の筋が額に立つてゐる。

——悪事は必ずれます、彼が前の日に豚の餌の中に首を突込んでゐるのを、劉家の婢が目つけたのです。——

私はもう聞くに堪えないでした、

——田景奎は私が幾つか鞭打つことに依つて、勘弁されましたが、私は本当に面目ないでしたよ、みんな私の教育が悪いんですから……——

村の先生はいつも伏目で物語つてゐました。そうして時々チエチエと舌打しました、そのチエチエが聞える時はきつと、憤慨の表情を見受けました、

——獣や鳥のものまで盗まんでも、よかりそんなものだ、人間たるものが、……いやしくも……——

——先生ちよいと待つて下さい、一体人間といふものは、獣鳥のものを盗む権利を持つてゐるかの如く考へてはゐますまい、そら豹と虎とを敷物にしたり、狸と狐を首に巻きつけたり、羊と駱駝を着物に織つたり、牛と豚とを皿の上に盛つたり、鰻と鴨をドンブリに入れたり、なかなかやつてゐますぜ——

——そう話をまぜ返へしては困りますよ、話は元に戻つて、その小泥棒の田景奎を鞭打つてゐたらですね、田坊のいふには、豚の餌桶に手をつけたものは、私ばかりではない、村の子供はみんなやつたといふのです、こいつには随分驚きましたね、道の私も——

村の先生は煙管を、きやうに指の先で廻転させてゐました、しかし彼の瞳は一度も煙管の上に

はそゝがれはしなかつたやうです、

——村の子供等が、鳥獸のものを盗んだ、このことは村の為にはこの上もない幸福を齎らしました、それはこういふ訳です、劉家の大旦那がこのことあつてから間もなく、屋敷の底から馬蹄銀を掘出して漢口から粟をどつさり買込むことにせられたのです、地の底から銀といふはつてですか、いやこの屋敷は銀で固つてゐると謂はれてる位です。銀行に地貯へるといつても北京まで出なければならず、やつぱり屋敷の下に埋めて置くに如かずです、

——漢口から粟が着いた時に、この広場に小高く積げて村のものを集めて、大旦那はいはれました、「うちの鶏の餌米を盗むもの、豚の飼餌場に首を突込むもの居ると、ちよいちよい聞いてゐた、よく考へて見ると、うちの牛や馬、鶏や豚が劉家の為に尽して呉れるものと同様に、村のお前さん達は劉家の田畑を耕して呉れたのだ、皆の衆怒らずに聞いて呉れい、謂はゞお前等の子供は、劉家の牛の仔と同じものだ、それなら牛の仔を大切にすると同じやうに、お前等の子供も大事だ。そう思つたらお前さん達の子供が餓えたり死んだりしては村の損ぢや、

——今度漢口から粟をどつさり取寄せたから、之からうちの牛の仔や、鶏の雛を羨むこともいゝまい、遠慮なく喰べて頂かう、粟の代価はまた豊年の年にぼつぼつ返へして呉れ、ばよい、また呉れんでもよい、今年の貸は帳面につけないうもりぢや、」大旦那が之丈けいはれた時に、村の人々は顔を互に見合はすばかりで、ほんやりしてゐました、

それからといふもの、この村の人々は、どこにも流浪することなく、安心して村に留つてゐられます。——

私は事前が牛馬、畜生より人間に至るまで及んだ話を聞いて、何んだかびつたり私の心持に合はないやうでした、でも先生は大旦那の徳を砌に讃めちぎつてゐました。

——この慈善は劉家でなくつては能きません、我々が幾らやらうと思つても能きないことなのです、私は生徒達に、実物教育できたことを喜びます、お金を貯へて置けば、まさかの時に臨んで斯くもよいことが能きことをよくよく吹込み聞かせました、——

先生はこの村只一人のインテリゲンチヤである、彼はその持合せた知識と雄弁とを以て、この村の隅々までも大旦那の徳を讃美し歩いたことでせう。そうして大旦那は恵れたる村で一人のブルジョアなのです。

——私は十年なり二十年なり後に、この飢饉の影響と結果が顕れるであらうことを恐れます、盗みした子供達が大きくなつた時には、この劉家の屋敷の底から、凡ての宝が掘り出されて、村の人達から搾取つた汗と膏の蓄積が、再び村の人達に返へされるでせう、その時が来るかも知れません、飢饉の結果は二三十年のちに顕れるでせう、人々はその為に準備せねばなりますまい、

私の言葉をぢつと聞いてゐた村の先生は、解つたのかそれとも解らなかつたのか、是了々々——そのとほりですと頷いてゐました。

夜も更けましたので、先生は帰つて行きました。

あくる日私は村を一巡して、先生の家がちよいと立寄りました、凡ての家は最も陋い家でしたが、先生の家は小さい乍らも、小綺麗に片着いてゐました、私は村の驢馬をかりて湯陰に引返へしました。

麦の芽をちぎる女

彰徳で下車した私は、文天祥の遺蹟を見て、その町に一泊しました、とうに免疫になつてゐる筈の私が、この夜はめづらしく南京虫にひどく悩まれました、朝になつて無暗に眠気がする、今日は幌馬車に乗つて行けば屹度、眠つて仕舞ふであらうから、驢馬に乗ることにした。彰徳の城を西に向つて田舎道を選んだ。

城の西門に辮髪^{びんぱつ}の生首が二つ吊るしてありました。どれもが頬のこけた男の首だつた。黒く変色した血がべつとりと、城門の煉瓦に滴の形をしてこびりついてゐた。首を鈍刀でちよぎり切つたと見えて、喉の皮がべらりと下つてくつ着いてゐた。二つの首は辮髪で以て、釘に吊るされてゐた。頬全体が塵埃まみれになつてゐるので、よく解らないが眼玉をギョリツとあいてゐるやうだ、私はそれでもちよつと暫く眺めてゐたのですが、胸がわるくなつたものですから、首に附けてある札の言葉は、読みませんでした。多分罪状が記載してあるんでせう。

驢馬の持主は、鞭を以て私の驢馬を砌に打つ、驢馬はずんずん進みました。西門を余程離れてから、私達はあの首の話を始めました。

——一体、あの殺され人々は、何をやつたのだい、——

——土匪だそうです、このあたりは今、随分土匪がゐるのですから、城を出るものは、余程少いやうです——

——そうか、土匪か、いつやられたのだ——

——四日前、この二三日は誰も城門を出ません、あの殺された土匪の同志が知事を大層怨んでるそうですから、危険ですから——

——四日前といふと何日だ、そうだね、今日は大晦日ぢゃないか——

——陽暦の大晦日になりますかねえ——

——俺も、今日あたり土匪にボンとやられると、今日が今^{マア}卅の終、今生の終となるのだねえ、ははあ——

——命懸けで、驢馬を追ふてるやうなものでさあ、そうして見れば一日一円は安いものでさあ——

驢馬はさつきから、何かいふと、自分が今日驢馬を提供したことを恩に着せやうとする、今日日誰だつて、雇れるものがない、命懸けだ等といふ。多分日暮にはどつさり酒手を、ぐずられることであらう。私は時計を見て、四時間往く為めに用ゐ、復へる為に四時間をつひやして夕の五時にはあの首の吊されたる西門に帰る予定で歩いてゐました。

途々私は村々の災況を見たり訊いたりすることを怠らないでした。

幾つかの村を過ぎましたが、どの村もどの村も空家ばかりでした、多分町に出て、車を挽いたり乞食をしたりしてゐるのでせう、それ等の家の雨戸は堅く閉められた上に、大きな石と材木が外から、凭せかけられてあつた。その窓といふ窓は外から縦横に木ぎれが打着けられあつた、

村は寂しいものでしたが、それでも時折、踏み止まつた人々を見受けました。

支那の村には柳の木が植ゑられてゐます。私はとところどころで、村の若者が、柳の新芽を摘む為に、木の上に攀じてゐるのを見ました、

——柳の新芽の萌ゆるのを如何に、彼等は待つてゐるのであらう——

これはある宣教師が、祖国の友達に書いたといふ手紙の一句なのですが、私は実際そうであらうと思つてゐました、ところが十二月といふに今から已に柳の芽を摘み取つて居る、村から離れて遠くから眺めると、柳に鳥が巣くんでゐるのか知らあと、思はれるのでした。

ある村の女達は麦の青葉を摘んでゐました。

——春の青葉を摘んで何にするの……——

女達は物言ひませんでした、

——今、麦を摘み取つたら、困るのではないの、いくら飢饉だつてそれを摘んぢや、何時になつたら食物が出来る？……——

——これが出ないから、止むをえず——

女達は乳房を指して、寂しい表情をしてゐました、多分乳を枯らさない為に、大切な麦の新芽を摘むのであらう、火の着いたやうに泣く赤坊の為には、希望の芽をも摘み取る人になるに相違ない。

楊壁村といふ村は、村としては大きい方であつた。そうだ、私はこの村の破廟——古いお寺の敷石に腰かけて、携へて行つた焼餅を食つたのでした。

彰徳からこの村に来る途で、後になつたり先になつたりして、私と前後して来たフランシスカンの坊さんがありました。赤いちゝれた長髯を、胸に光る十字架の直ぐ上までのばしてゐました、鼻が馬鹿に小さく、白人には珍らしい低いものでした〔。〕彼は幌馬車に乗つてゐたのですが、馭者と臂をつき合はして、幌の外にかけて居ました、その幌馬車の後ろから別に二台の馬車が續いてゐました、

赤みのある黒い外套には、頭巾がある、読者は知つて居られるであらう、それがフランシスカンの僧衣なのです、彼は大きい醜い支那靴を穿いてゐました。その防寒用の支那靴は片方が一貫目もあらうかと思はれる程に、綿が入られてゐました。

弁当の焼餅を食べ終つた頃、その宣教師が破廟に着きました、幌馬車を止めて。坊さんは馬車の中から、太い袋を出した〔。〕それがぐさあつと音たてたことに依つて、私はその中にお金が入つてゐることを知りました。また坊さんは幾つかの着物の束を車から落ろしました。その着物は何れも、浅黄の綿布で作られてゐました。

物の二三十分も待つてゐますと、村の人々がわいわい喧しく騒ぎ乍ら、この破廟の前に集りました、多分馬車の馭者達が、吹聴して歩いたのでせう。

村の人々は何れも寒そうな青ざめた顔をしてゐた、わけて子供等は栄養不良であつた、子供の癖に、目が落窪ぼんでゐる、髪毛がうすいまばらに生えて居るのです、

お坊さんは二つの馬車を道に横ずゑに置いて、馬車と馬車の間をやつと人間が通れるやうに隔たらせました、彼はふつと馬車の上に立ち上りました。

——この飢饉の折柄に、土匪の為に掠奪されたこの村を神さまは慰めやうと欲しました。今日神は私を使ひして、この村に遣された、——

お坊さんは外にも何か、言つてゐたやうです。露天演説が終ると、彼は馬車から降りて、十時を切つて俯してゐました、暫くして再び立上り、馬車の上から何か知らあ、早々に言ひました、すると馭者は村の人々をひとりひとり二つの馬車の中間を通らせました、

お坊さんは手づから、大人には一円銀貨一枚、子供には着物一揃を呉れてゐました、貰ふもの

は、大きい声で話合つて、はしやいでゐました、与へる人は黙つて、心持ちわらつてゐました。時々混雑するやうでしたが、少しでも混雑すると坊さんは、呉れることを中止して、押合つてゐる人達をちつと見てにつことわらつてゐました、

分配が終つてから後に、私は坊さんと話したことに依つて、彼が彰徳の司祭である事、フランス人であることを知りました。

私があの首の吊した西軍を再び通りたくないと言ひ出した為に、驢馬追ひは彰徳の北門に向ふべく、少なからず廻途しなければならなかつた、その為に驢馬は随分、鞭打たれ急がせられました、

彰徳の城が漸く見え出した時に、一人の五十男が二人の子供を担いで来るのに、出逢ひました、子供は五つに三つで、二人とも女でした、天秤棒で担れてゐるにも拘らず、二人は大きい声で話合つてゐました。

驢馬追ひの話に依ると、それが子供を売るものであることが解つた、それと知つた私は、直ぐ驢馬を止めて、その五十男と物言ひかはしました、

——その子は一体幾らで売の、いゝ子ぢやないか——

驢馬の傍に子供の乗れる籠を置いた。

——実は買手もありましたが、この五つのを十二円といふのですから、之れぢや……と思ふて戻つて来たので……それも買手がよいたちの人ですと、この子の為に仕合せですが……——

少し急ぐからといって、男は子供を担いで行つて仕舞ふた。子供にはそれでも、着物が着せられてあつたが、その男は新聞紙だの、布片だのが、腹だの足に縄でしばりつけてありました。脚胖を穿いたやうにそれが、うまくくつついてゐたやうです、

——子供を売りに行つて、手放さないで帰つて来た子供の親心はよく解る、けれどももう一度売りに出たら、こん度は手放して仕舞ふであらう。

家に夫を待つ母親が、売られずして帰つた子供を再び眺めて、反つて喜ぶであらう——

私はいろいろと、その貧しい家庭のことを考へて見ました、そうして何かしら、私はその家族を救ふべき命令を受けうるかのやうに感ぜられたのです、

それは極く唐突の行為でした、私は驢馬を後向けて、その男を呼びました、けれども、その男は聞えないまゝに、僅く弱い冬の日の中を、ずんずん走り行きました。

——やい、驢馬屋、お前さんこれに乗つて、今の男の村の名と、姓名を聞いて呉れ、頼む、急いで行つて呉れ——

——ぐずぐずしてると彰徳の門が、閉まつて仕舞ふ、そうしたらどうするんです——

——愚図々々いはいで、さあ行つて、頂戴、門が閉れば露宿でもする、何んでもする——

驢馬追ひの男実に呑氣にかなえてゐる、じれつたいのないので、実に溜らなかつた、それでも驢馬追はその村名と、男の名を聞いて帰つて来たからうれしかつた。

あの貧しい家の為め丈けになりと、自分は何とかせねばならぬ、それができずばせめてものことに二人の子供の為め丈けになりと何とか方法を講じやう、自分はどうしてもちつとしてゐられない、——その時の私の心持は、全く緊張してゐました。

彰徳に帰つたときは、もうどつぷり暮れてゐました。

前夜の宿はあまりに南京虫がひど過ぎたから、私は北門の小さい棧に泊ることにしました、

大晦日であるから、支那麵を煮させて、年を送ることにしました、土間に炭をドシドシ焚かせて、私は腹だの背だのを暖めました。

こゝで宿の部屋の構造を書く必要がある、間口二間に奥行一間半の角い部屋であつて、畳二枚大の炕——おんどるがある、炕の下は土間であるのだが、そこに私は木炭を焚かせてる。馬鹿に煙る炭である、戸が開けば寒し閉め切つて居れば眼から涙がぼろぼろ出る程にけむる〔、〕私は往生しました、そうかといつて焚かねば寒くつてやり切れない、それでも十一時十二時になつた頃は木炭が真赤に焼けて、煙らなくなりました、其ころほどちらの方向からか、ベルの音が聞える。多分天主堂のベルであらう、私は昼見た司祭を思起しました、カンカラリン、十字を切つて跪き乍ら、年を送り年を踏へても聖僧の姿がなざまざと目に見える、思はず私はバスケットの中から携へて行つた小型のバイブルを取出して読みました、

十二時を少し過ぎたと思ふ頃、私の部屋のドアを叩くものがあります、トン、トン、……私はゾクツとしました。部屋の雨戸は観音開きになつてゐて、押せば直ぐ開かれるやうになつてゐた、ギー—軽い軋る音がして、雨戸が開きました〔。〕戸の外に立てるものは女でした、私は稍々安心しました、十八九の姑娘——むすめであつた、垢が満面に淡くこびりついた、赤い着物を着てる、頬と唇に紅をべたべた塗つてゐる。私はどうするかぢつと見てゐたのですが、姑娘は私の毛布が敷延べてある、私の寝るべき炕の上にごろりと寝そべつて仕舞ふた、私は嚇としたやうでもあり、同時に舌の上に淫らしいものが沁みでて、喉をゴクつと音立てゝ滑べつて行きました。

天主堂のベルがカンカラリン、又聞える。早天のお祈があるんだらう。

——走罷……不要働——行け……女お前には要はないんだから——

姑娘はまだぢつとして、寝そべつてゐる。私は口をとんがらがせて、日本語を以て、サタンよ退け——怒鳴りました、女にいつてるのか自らに言つてるのか、よくわかりませんでした、女はすすご黙つて出て行つた、これが支那宿につきものの淫売です。

私は思ふ、あの夜が若しかして、大晦日でなかつたとせば、さなくとも嚴肅な心持のする元日の朝でなかつたとせば、あの夜天主堂からベルの音が聞えなかつたとせば、私はあの女のぶくぶくふくれた女の肉を漁つたかも知れん〔。〕未だ曾てあの時程に誘惑が肉迫して來た事はなかつた。確に好奇心が十分な魅力を持つてゐました。

私はベルの力を信ずる。

清水安三「足洗ふ人(三)」(『表現』第3巻第7号、1923年7月1日) 119～128頁。

或る日の逆立

それは一九二一年の一月十四日の夜だつた。その日の午後飢饉地視察から帰つた私は、その足で、家に帰らないで、ある飢饉救済協議会に出席した。十四日の夜に協議会が開かれることを知つてゐた私は、その夜に間に合ふやうに帰つたのでした。断つて置くがその協議会には北京在住の日本人は私ひとりきりであつた。凡ては日本から遣されて、飢饉救助の方法を講じてゐる人達だつた。協議会の席に這入らうとした時に、——ちよいと君……私を促して別室に伴ふたものが

ある。それは大層頑丈に堅つてゐる愛国者であつた。

——貴君は飢饉は嘘も嘘、大嘘あれは毛唐のプロパガンダだ〔〕。そういひ給へ、そういえば君の男は一枚も二枚も上る……

——そうですか、そうでもありますまいが……

日本にはこういう愛国者があるから、たまらないと思つて見ましたが、実のところ、一種の脅威を感じさせられました。でも協議会が始ると私はそのことを、忘れたかのやうに、心の隅処に置いてきぼりにしてゐたのです。

——日本から集められた義捐金は、支那人の為にさゝげられたのであるから、支那の督軍、知事の手を経て、飢民に与へるがよい——

——督軍や支那の役人の手を経るならば、飢民の手には一文だつて渡りはせぬ。それは督軍と役人の腹を肥やすやうなもので、寄附者の主旨に叶はぬ。……現に趙作客に、満鉄が依頼した十万円は、今に猶趙作客ににぎられて居る。何でも趙作客は大總統に手紙をよこして、満鉄から十万円貰つたから総統筆染の額面を満鉄に贈つて呉れといつて来たそうだと。総統は額面を贈つたが、お金は一文だつた。山海関を越えなかつたそうだと、ハハツ——

——支那人の督軍の腹を肥やしてもいい、ではないか、どうせ支那人心を手なづけやうとするのだから、飢民の腹を肥やすよりか、有効ではないか。……

——督軍の歓心を買ふ位ならば、毛唐の宣教師の方に、依託するのが賢明ではあるまいか。毛唐達が排日の根源であるとなれば毛唐をして日本に好意を抱かしめる最高の機会ではなからうか。而もその上に飢民の腹も肥やすことが出来るといふものだ。督軍の手を経ると督軍の歓心は買へるとしても、飢民の口には這入らぬ懸念がある。毛唐の方はそれは大丈夫だ。……

甲論乙駁とはこのことであると、私は思ひ乍ら謹聴してゐたのです。

——毛唐の教会の補助金を出すのは御免だ。

藪尻の瞳の持主たる一紳士が、さも蔑んだ口調をいひ放つた時に、デブプリ太つた男が誰が補助金を出すといつた——呶鳴りつけた。

——馬鹿、貴様に解るものか……

——人を馬鹿とは何んだ……

——馬鹿だから馬鹿といふんだ……

藪尻は遂に、デブにぶん擲られた。マアマア……——でやつと治つたものの、坐が白らけて仕舞ふた。こうひふ光景は、協議会、議会等で屢々見られる極めてありふれたものなのだそうですが、場慣れぬ私にはどうなることか知らあと、かなり驚かされました。

発言者が俄に沈黙に陥つて、随分長い間、協議が途切れしました。人々は机をぢいつと見詰めて、もぢつとも動かぬ。その時でした、最初から沈黙してゐた例の愛国者は、——尤も皆が皆まで愛国者なのですが——突然に口を切つた。

——諸君、色々御意見があるやうですが、この人は実地飢饉を見て来て、今日帰つたばかりの人です。この人からどんなにヒドイ惨状であるかを承らうぢやありませんか……

別室に呼んで、飢饉とは嘘も嘘、大嘘といえと命じた愛国者先生は、自ら立つて私を紹介しました。私は全く出し抜かれたやうな心持がしました。愛国者は私の顔に穴が開く程に見詰めてゐる。その瞳は私を恐喝してゐる。

——私は開口第一、先づ飢饉が如何に惨状を呈して居るかを詳細に物語らねばなりません……
やつと私は満身の勇を鼓して、これだけをいつた〔、〕夢中でいつたのです。あとは喉が詰つて声が出ぬのでした。私はそうと例の愛国者先生の方を見ました。驚いたことには、先生は怒気を満面に現して真赤な顔をしてるかと思へば、全く案外にも、ニツと笑つて私を見詰めてるではありませんか。下つた目尻に皺を寄せて笑つてるではありませんか。私が□□からになつた喉から、どうしても声が詰つて出ない時に、愛国者先生はいひました。

——詳細なところを承りませう。謹聴、その詳細なところが支那には三年に一度はある飢饉かも知れむから、そして今年丈けを喧しくいふのは、毛唐のプロパガンダかも知れんから……ハツハツ……

私は先生のニツと嗤らつた意味がわかつた。彼は私に依つて、開口第一に語られた言葉が、飢饉を否定する反語とのみ解せられたのである。

——いゝえ、今度の飢饉は七十幾つの老人すら、曾て知らぬものなのだそうです……

愛国者先生つと立つて、謂ふところの席を蹴つて、会場を出て行つて仕舞ふた、私は益々勇敢に猛け立ちました。

——……以上述べた如くに、多くの飢民は日々に斃れつゝあります。子供を売る者、木の葉を食ふもの、誰かこの惨状を見て、手を措いて傍観してる事が能きませう。今は拙速を尊びます。

聞けば五日断食することに依つて、お金を節して寄附したといふ、幼稚園の保姆もあつたとか、それ等の人人は決して、支那人の歓心を買ふために投出したのではないでせう。諸君はどうも、一日も速く、飢民の手に食物を与へてやつて頂きたい。今は徒らに商議するの時ではないと思ひます……

私はやつと之丈けの結論を、詳細な見分報告の後に付け足した。すると——わかつたわかつたもういゝ、沢山だ、わかつたわかつた……人を愚弄したやうな声で、私の演説を遮ぎつて仕舞ふた、尤もいひ度いことを略々いつて仕舞ふた後であつたから、私は黙して席に着きました。

——あの人の話によると支那の農民達はさも困難らしく見せかけて、施しにありつかうとしてるそうだ。わけて外国人の視察者には特にそうするそうだ。……

……もうそんなことはどうでもいゝぢやないか。今は飢饉の真偽を論議する必要もあるまい。まさか各国がやいやい騒いでるのに、日本だけがけろりつと傍観して居られる訳でもあるまい、謂はゞこれは国際体面上の話なのだよ。だから五十万円でも、百万でもミニマムを出して置けばそれで沢山だ。……

どうして恧ふまで違つた心持の人達ばかりだらう。私は旅行の疲労もあつたから、中座して家に帰つた。湯を浴びてから後家ではその夜遅くまで、旅行の土産話で賑ぎやつた。

その夜の土産話の所には、呉れた毛布に関してはワイフから嫌やな顔も見せつけられなかつた。私は案外にも思ひ、やつと安心した。ところがずつと後になつて、何かの拍子に、御機嫌のわるい時に、惨々に愚痴を並べられました。

——女房にゴム草履一足買つてやれぬ人間が、慈善する権利があるものか、あの毛布はうちの家宝だ。さあ、早く行つて今からでも取返へして来い。意気地なし……

また始つたと思つてゐるものの、聞いて気持よくはないのでした。

一月も末近く廿八日であつたか、再び協議会が開かれた。その協議会は割合に進行係が気がき

いてゐて、議論が纏つて行つた、そうして三万円ばかり携へ来つたお金を用ゐて、衣服を拵え、それに「日本人寄附」と染抜いた布片を縫着けて、支那役人に交附する——といふことに話が決まつた。私は何んでもいゝから速く、実行することを主張して、その布片の可否を論争したがよいと思ひました。これはずつと後に半年も経てから聞いた話ですが、支那側は叮嚀に一枚々々その布片を、取除いて窮民に与へたそうです。

それは二月の初でありました。ある東京のミリオニアーが日本人で自ら飢饉救済に従事したいものはないか。あれば一万五千元を提供する。その実行方法を詳細に書いてよこせといふ、私にとつて最も興味ある語を聞きました。日本人が自ら従事する……これも例の愛国慈善家だい……チエツそうは思つてみたものの、私は易県の一枚蒲団にくるまる一家、子を売る彰徳の五十男、まざまざと飢饉地の惨状が、眼に映つて来るのでした。私は書齋に籠居して一日二晩考へた。思案して見たのです。

——よし、彼達の為には、偽善者の手先にもならう。喜んでならう、ブルジョアの手先ともならう。俺は何にでもなるぞ、そうして餓えたる人々の為に立たねばならぬ……

この決定が出来上つた時にはもう前進がおずおずして、ぢつとして居られない、数度、私の得意な逆立をして、書齋の中を歩いた。

——何していらつしやるの、逆立などして、……

——えへ、俺はやる、愈々やる、……

——何をなるの……

——俺はやる、一万五千元だ、えへ……

——馬鹿、何をやるのよ……

ワイフは逆立になつてゐる私の後から、砌に問ふのである、着てゐたドテラの裾は逆立によつて顔を掩ふてゐる、サルマター一枚の臀がむき出てる。

——こら、何をやるといふのよ、いはぬか……

ワイフの奴、サルマタの盛上つてゐる小山を指先でぴんと弾き腐つた。——いたづらは止せ……やつと逆立から起上つて、救済の実行案を起草した。私は五百名の児童を飢饉から救ふて、麦の収穫□で教育する——災童収容所案を起草しました。視察旅行の時に幾つかの収容所を参観した私は、スラスラと書上げて仕舞ふたものです。

再び私は例の逆立を実行せねばならなかつた。ブルジョアの手先を志願した丈けでも、逆立を実行することであつたのですが、それが容れられて二月七日には、既に災童収容所設立に取りかゝる段取になつてゐました。バラツクとしては、支那の兵營を借受けることが出来た。知人の支那人を十三名頼んで、手伝つて貰ふことにした。

ある大学の先生をしてゐる老人を、所員取締に、医者有一名に二名の看護婦、女学校出の娘を三人教員に、知人の妻君を二人来て貰つて保姆に、女子高等師範を出たといふ年増の女を教育主任にして、教員と保姆を監督させ、庶務二人、書記一名といつ□やうな具合に、部署を定めた。飯糰人足その他の小使は、飢民の大人を引ばつて来ること、計画はとんとん拍子で捗つて行きました。

最初、排日の折柄であるから、支那人が喜んで手伝つて呉れるかどうか、甚だ心配したのであ

るが、案ずるよりも生むは易かつた。しかし私は細心に心を用ゐた。収容所の殆んど凡ての物品は、支那産のものを使用した。食器から衣料凡ては所謂国貨ばかりであつた。何故に国貨を用ゐるか、——無論私は口に出さなかつた。恰も無意識の裡にそうしたかのやうに装ふてゐた。それはつまらぬ小事であつたかも知れぬが実は私の心からのつとめでありました。

——支那の為に献げられた金だもの、一文一厘たりとも、支那を益せない金のないやうに——とは私の心からの望でした。

凡ての準備が出来上つた日の晩、私は所員をお茶に招いて勢揃をしました。開会に当つて私はお祈りすることを忘れなかつた。

——神よ、曾てナザレのエスはいひました。爾曹は何を食ひ、何を着むとて憂ふるか……と。けれども、どうしたものか人間は、二羽一錢にて売らるゝ小鳥にも劣るものらしいです。此度の飢饉を見ますに、働いて働きぬいた人達が、餓ゑてゐます。彼達は神の国と正しきを求めなかつたかも知れませんが、無智な農夫であつて、さして罪人とも思はれません。私共は、ナザレのエスすらも考へ及ばなかつた飢饉ではないかと思はれます、神さま、あなたは之を以て、彼等人間に何を語り給ふといふのです。

私は色々考へて見ました。煩悶と思索に幾日かを費したる後に私は信じられます。之れは皆人間の無智から、そゝがれた人間苦の盃だと信ぜられます。凡てを天に任せて、井戸を穿つことを怠り、天に隠された水が、爾の立てる所に泉としてあるに拘らず、天にのみたより、浮雲の走るのを夢見みてゐたからであると信じます。

人間よ、神の力を産み出せ、自然を征服するの権利を与へてあるのではないか、私は自分の耳朶にあなたの声が聞えます。

さらばとて無智の農夫を責めやうとは思ひません。せめてそのことにその幼きものを伴ひ来つて、一つには目前焦眉の飢饉を救ひ、二つには彼等に文化の力を吹込みたいと思ひます。

どうか、我等の収容所がその大いメツセイジを果すことが出来るやうに、私共を祝福して下さい、アーメン……

お祈をして後、私は所員に向つて、短い演説を試みた。

——諸君は、私を手伝つてやる、日本人を手伝つてやると思はれるならば大間違である。私が諸君を手伝ふのである。私といふ人間には国境が感ぜられないのです。……

かくて災童収容所は緒に就きました。

餓ゆる子供を策めて

それは災童収容所を設けてから二日目の朝でした。それはその冬で最も寒い日でした。私は餓ゆる子供を策めて、北京から程遠からぬ長辛店といふ町へ出掛けました。

その町には飢饉から集つた難民が何千といふ程に住んでゐました。それらの人々の為にかなり大きい施粥場が立つてありました。私がこの町を訪れた朝も、幾千の人々が文字通りに殺到してゐました。

それらの人々は、この町の附近の田圃に穴を掘つて、この施粥場をあてにして住んでゐました。飢民の数は日々に増して、施粥所の与ふる粥の一人分は日々に減ぜられました。難民達いつもか

も不安を抱いて、細い命をつないでゐたやうです。

狐の穴のやうな住居が、幾千と雑然とあるのですから、不潔なことはいふまでもありません。伝染病が所謂猖獗してゐました。殆んど凡ての子供は、真赤な目をしばしばさせてゐました。

泥土でこね上げた高さ二尺ばかりの家も、幾百と拵へられてあつた。ぼつりと穴丈けあけられた家もあつた。この難民の群の為に、一人の医者も働いてゐなかつた。そして瘠せ衰へた顔に、目を窪ませた老人の死骸が、あちらにも一つ、こちらにも一つ棄てられてゐました。

この難民窟に入つた時に、私は全身がゾクツとしたものです。身内がスクスクするのを感じました。恰もそれは人間が恐怖を感じた時の心持でした。

ずうと略々一巡した頃には、最初感じた心持とはだい分違つた感じを抱いてゐました。——難民の凡ては、曾て見ぬ純朴な支那人ばかりだと思ひました。髪の毛ばらにぬけた男の子、目のくぼんだ女の子達が、私につき纏ふて、跟いて来る、その物珍らしいような顔は、田舎者らしい表情を持つてゐました。

一寸でも声かけてやると、どの家のおやぢさんも、ニヤニヤ笑つて——まあ這入れ、陋い所ではあるが等と挨拶するのであつた。この難民窟には正直者ばかり集つてゐる——とも思ひました。

私は難民窟から着物を着て居らぬ子供を、集めました。新聞紙を胸に巻きつけて、その上から麻縄をぐるぐるゆわいで居る子供もあつた。股を露はにしてゐる少女もあつた。三十二名のものを立所に集め得て、私は長辛店の停車場に向ひました。私は能ふ限り歩調を緩めて歩いた。それでも子供達、弱り切つてゐる彼等には、何人かの落伍者を出した。僅か一里のみちのりであつたにも拘らず、わたしはあれを負ふ□てやつたり、これの腕を取つてやつたりせねばなかなかあつた。

どうしても走不了——歩けぬといふから負つてやつた子供は、八つの男の子だつた。彼の二つの手が私の両肩を、持つてゐる、私は顎を胸に引着けて、肩から胸に伸びてゐる子供の手を見ると、くさのやうにこびりついてゐる垢が、血みどろになつてゐる、赤い肉がひゞ割れて口をあけたやうになつてゐる。黒い垢を溜めた爪が伸びてゐる。それ丈けであるならまだしも、子供は時々手を動して、指の股を私の洋服にこすりつける。ふと私は注意して見た時に、その小さい指股には薄赤いブツブツが一ぱい出来てゐた。

私は涙のにぢみ出るのを感じました。

やつとのことで停車場に着いた。私は一個二銭の焼餅を一人に二つづつ買つて呉れました。久振に焼餅にありついた彼達は大喜びであつた。腹がふくるとピンピンして跳ね廻つてゐる、汽車を待つ間に一つのエピソードが手に入りました。

一人に二つづゝの焼餅を遣つた筈であるのに、一人の子供が四つを持つてゐる。見たところ九つ位であるが、顔がませてゐるにも拘らず身長が馬鹿に低い。眼尻に目糞をためてゐる。破れた着物から、ところどころ皮膚が見えてゐる。破目からのぞいてゐる皮膚は斑点をこしらえて、日に焼けてゐる。

——なんだ、お前は四つも持つてゐるではないか、どうしたんだ。……

私はてつきりそれは、小さい子供の物を盗つたのだと思ひました。

——ううん……

首を横に振つて黙つてゐる、私は嚇つとなつて、吐出すやうに嘔鳴りました。

——馬鹿言へ、それは盗つたに決つてゐる。この小盗児……

子供はもう今にも泣き出しさうになつてゐる。さつきから私の顔をニヤニヤ笑ひ乍ら見詰めてゐた女があつた。私から十二三間も離れた停車場の柱にもたれて、こちらをちつと見てゐる。四十近い女である。からだの小さい割に顔が大きい。下唇がべらりつと出てゐる〔。〕上唇が薄いにも拘らず下唇が厚い。赤ばんだ髪を無雑作に束ねてゐる。その女が三角形の小さい纏足を、外輪に運ばせて、やつて来ました。

——先生、その焼餅は私が買ってやりました。どうぞ叱らんで……

女は突然いひ出した。

——わたしはそれの媽——おふくろで、へい……どうもお世話になります……

かりにも人を疑ふたことを恥ぢた私は、女の顔をちつと見続けてゐられなかつた。焼餅を買ふ丈けの資力のある親の子供は、救済せんでもいい。だから問詰めたのだ。——私はそう思ふて見ることに依つて自分の疑つた理由を拵へて見ました。

——そうか。では、お前さんは焼餅を買ふ丈けのお金があるんだね。それではやつぱりこの子供は、お前さんの手許で養ふがいい。……

女は黙つて立つてゐる。

——食ふものさえあれば、矢張り親の傍で暮らすに、こしたことはない。……

鼻をすゝり出したかと思ふ裡に、肩をしゃくり上げて泣出しました。

——泣くに及ぶまい。……——

——何も一人よりない子供を手放したかあ、ありません、食ふに困ればこそ、お預けしたのです。私は死んだ祖母から貰つた髪具を、今そこで売つたら二十八錢に買つて呉れましたから、これに焼餅を買つて呉れたのです。秋からこの方、それを売らう売らうと何度思つたか知れませんが、若しも餓死する時が来たら、禿児——子供の名であらう——に之をやつて……と思つてゐました、仕合せにも禿児はもう之れで餓えることもありますまい。長い間焼餅を食はせたこともありませんでしたから、今日は……愈々売りまして……

女は二言三言葉話すと、歎息してゐる。やつと途切れ途切れに之丈けのことを言ひました。之で焼餅の出所も明かになつた訳です。私は無暗にセンチメンタルになつて、思はず貰ひ泣きしました。

——……おい禿児、俺にもその焼餅を一つ食べさせてお呉れ〔。〕やつぱり親は有難たいものだなあ……おふくろ、安心して呉れ給へ、ぢや、禿児は暫く預るよ……

私は新派劇の役者の使ふセリフのやうな別れを告げて私達は、荷汽車の中に乗りました。外にも数名の親達が子供を見送つてゐました。

長辛店の駅長は、私達の為に荷物車を仕立てゝ呉れました。常ならば牛馬が運ばれる筈の荷車の中に、三十二名の子供と乗込みました。その荷車には屋根がなかつた。私は屋根が無くつて反つてよかつたと思ひました。若しかして屋根でもあつたらうものなら、子供の嗅いにはいに随分悩まれることであらう。

間もなく汽車が着いた。私達の荷物車はその、一番うしろに繋がれました。

汽車が動き出した時には、子供達はわいわい騒いで喜んだが、跟いて来た親たちの中にはしくしく泣いてゐるものもあつた。私は寒かつた。やつぱり嗅くつてもよいから、屋根のある荷車に乗れば

よかつた——とも思ひました。

汽車が北京に着いた頃は日がどつぶり暮れてゐた。汽車が月台——プラットホームよりも長かつた為に、私達の荷車は、下車しやうも危なくしておりられない。わけて荷車であるから踏板の階段も拵らえてない。子供等をとびおろさせる訳に行かぬ。私は全くのこと困つてしまひました。プラットホームがすぐそこに見え乍ら、どうすることも能きぬ。

車掌に哀願して見たけれども、承知しそうもない。どうすることも能きぬ。私は先づ飛下りました。そうして荷車の出口の下に立ちました。

——さあ、誰からでも来い。……

子供等はひとりひとり私の胸に向つて、飛び込みました。私は抱いてはおろし、擁してはおろし、三十二名の少年少女を十分程の間に抱き下ろしました。泥だらけになつた私の外套を、子供達ははたいてゐました。

新聞を股にゆわいてゐた子供の足が、裸になつてしまつたり、ぼろぼろの破れ目に手の指が引掛つて破れたのもありました。私達が収容所に辿り着いたのは、彼是九時頃でありましたらうか。

清水安三「恐ろしき一夜（「足洗ふ人」の続）」（『表現』第3巻第10号，1923年10月1日）123～129頁。

全体の災童を三組に分けて、三人の女教員が国語と算術とを教へました。短い期間の一時的事業ですから、多くを望めませぬ。国語と算術丈けが、出来る丈け多く教へられるやうに、取計らつたのでした。それでも賢い子供は、三ヶ月ばかりの間に、読本を四冊まであげ、算術を比例まで漕着けたそうです。

こゝまで読み来つた読者は、さあこれから暫く教育談を聞いてやらねばならぬか。面白くもないと思はれるであらう。が、話はまるで方向違ひのところに道草食ふのです。而もその道草の話がだい分、これから長く続きそうなのです。それは他ならぬ色気話です。

三人の女教員は、何れもかなり各々はつきりした個性の持主であつた。杜鈴蘭といふのが主任教員で、高等師範出のオールドミツスでした。二十七だといふのですけれどもちよつと見たところ二十三四には見て見えぬ訳ではないでした。どつちかといふとまるい顔立、少々外歯です。女としては濃う過ぎる程に黒い眉毛が、目にせゝこましくくつついてる。狭い額がこゝろもちおでこです。ところがこの女は、これで男の心を引着ける為めに充分なる魅力を有するのです。彼女が男をころつとさせる力は、彼女の顔に在らずして、彼女のからだにありました。彼女はこぼれるやうな肉体を持つてゐました。

道ですれ違つて、人にふる顧みなれるやうな女ではなくつても、同座する男子を、美感よりか、もつと底力のある何物かを以て、圧する、そゝる女でありました。

正直なところ、私はこの女を見る度に、自らの落着きを失ふのでした。

彼女は最も大い男児のクラツスを担任してゐました。その教室に入ると、監督者として立つてゐる筈の私が、何かを口実にしてその教室に入浸つてゐるかの如く、感ぜられてならないのでした。その教室を出て、他の教員の教室に行くと、何となく物足りない、寂しい心持がするのです。

それは寒い日の夕でした。事務をとつてゐるところへ、彼女はとびこんで来ました。

——おゝ、寒いことちよいと一あぶりさせて頂戴よ……

子供を遊ばせて帰つたばかりの彼女は、自分の部屋にストーブが消えてるのを見て、私の部屋に駆けこんで来たのです。

——いつもかも忙しそうなのね。ちつとは呑気に構へてはどう……

この頃彼女の言葉扱ひが、兎角、慣れ慣れしくて困る。こうやられちや、今に統御が着かなくなる。と思つたり、また慣れ慣れしい言葉をつかつて呉れるのを、悦んだり、どうもこの女に対する自分の態度は落着かぬと考へたり、何もかも一緒に頭に中を往来した。

——明日いらつしやる時に、キヤラメルを持つて来て頂戴な。それからチョコレイトも、持つて来て下さる、そう、本当、……

勝手なことを云つてやがる。私はさつきから、せつせと事務を取つてやうなのだが、薩張仕事は運ばぬ。確かその時は報告書を拵へてゐたのでしたが、幾ら書いても書潰して仕舞つた。

——今日も持つてゐらつしやるんでう……頂戴よ……^{ママ}

その頃私は幼い子供が、例の想家をやり出す時に、たらかせる為に、いつも幾らかの菓子をポケットに入れてゐた。

——下さいてば、客坊……

彼女は自ら私のズボンのかくしに手をつゝこんで、幾つかの菓子を取つちやつた。私はさつきからまだ一言も喋らない。只柔和なる莞爾を漏らしてるのみです。この時も只わらつて為すが儘に委せてゐました。

彼女はキヤラメルを頬張り乍らストーブの傍に唱つてゐる〔。〕私はどうも気が落着かぬので、事務机をしまつて、家に帰る支度をしました。

——お帰りなの、そう。早くお帰り遊ばせ、太々——奥様が待つてゝよ……

それでも私は片言一句も、喋らないで、只柔和なる莞爾を以て、応答して収容所の門を出ました、門まで彼女は送出した。

——さやうなら……

——さよなら……

この時始めて只一言、口開いたのです。

——明日、今申上げたものをね……

私は首を横にも、縦にも振らずして、とつと歩いた。余程行つたと思ふ頃、何気なくふと後向いた。彼女はまだもぢつとこちらを向いてゐるのです。

その日家に帰ると直ぐ、収容所の庶務の者に、電話をかけて、——明日の朝、門頭溝といふところへ、災童を連れに行くから、誰でもいい、一人停車場まで来とつて呉れ。自分ひとりでは不便であるから、誰でもいい、来るやうに……と吩咐けて置きました。すると暫くして、庶務から電話がかゝつて来ました。——女の職員でもいい、でせうか……といふのである。私は誰でもいい、が、大概ならば男の職員に越したことがない。誰も手すきのものがなければ女でも已むを得ぬ……曖昧な返答をして置きました。

翌る朝停車場に行つて見たが、誰も来て居らぬ。一体誰が来るのか知らぬ。ちよつと考へて見る丈けでも楽しみだつた。すると、案外にも、実は予想通りに、杜鈴蘭がやつて来ました。

——君がやつて来たのか……

——あたしではお気に召さぬの……

——いや、別に男でなければならぬやうな力業をするんでもないから、君でもいゝんだがな……

——それぢやいゝぢやないの……

——ぢや、行くとせうか、……

——ちよいと、何だか新婚旅行のやうね……

——馬鹿……今日は洋服まがひの支那服着てるのね……

——でも、……今日は支那人に見えない方がいゝの……

——言葉を聞いたら直ぐわかるよ……

——あなた、あたしに日本語教へて下さる……本当……

汽車は私達二人きりの乗客でした。尤も運転手だの車掌だの、巡査だのが乗つてゐた。汽車と
いつても、三つばかりの箱を繋いだ短いものだった。

——鈴蘭……私はよく彼女の名を日本読みに呼んだ。……

君は去年の排日運動には、どんな事をやつたかい。……

——排日の話なんか、お互に話さないことにすること、あたし達には世界があつて、国家もへ
ちまもないのだから……

——鈴蘭は今こそそんな事いつてるが、去年は大分騒いだのだらう。……

——今はでも、あたし随分日本人に感心しててよ……偉いは……

——何が偉い事があるもんかい……

——本当、西洋人よりか、偉いわ。西洋人は随分いばるから嫌ひ。あたし達をセコンダリーピ
イブル扱ひするんですもの、……日本人の方が偉いわよ……

——君は知らんのだよ……

——知つてるわ、……支那人すらしない事をするんだもの〔。〕痺癬の子を風呂へ入れてやつ
たり、かさぶたのやうな足の垢をこそげつてやつたり、偉いわ。あたしあれには関心した。……

——ははあ、また言つとる。……

——あれは西洋人では出来ないこと……

一つの腰掛に二人が掛けてゐる。彼女のからだの温みが私のからだに伝つて来る。私はもう自
分がどこの国の人であるか、彼女が何処の人間であるか、すっかり忘れて、相談じてゐたのだつた。
そうして時々自分が収容所の経営者であつて、彼女がその職員であることを忘却してゐた。また
自分は妻があつたり、何かしらうるさい周囲に取巻れてゐる人間であることすらも、忘れむとして
ゐました。

汽車は午過ぎに門頭溝に着きました。警察庁からの話によると、二十名ばかりの災童が停車場
に来て私達を待つてゐる筈でした、にも拘らず一名も来て居らない。私達の乗つて来た汽車は三十
分停車して、直ぐ北京に引返へすべき汽車なのである。その外に今日帰る汽車はないのである。
だから災童を停車場に集めて置いて頂くやうに、呉々も依頼して置いたのである。どうするわけ
にも行かぬ。手ぶらで帰るのは余に、馬鹿々々しい。

——どうしやう、杜さん……

——どうにか、なるから兎も角、災民窟まで行きませうよ……

二人は兎も角災民窟まで行つた。そうして十二人の災童を連れる約束して、明日の午後停車場

に集合するやうに吩咐けました。さて用事は済んだのであるが、北京に帰らうにも汽車がない。二人は停車場の前にあつた小さい棧に、泊ることにしました。

小さい宿屋ではありましたが、それでも二つの客室があつた。南向の一つの家屋が二つに仕切られて一つは二間間口で、一つは一間間口でした。私は大い方の部屋を占領して彼女は子^{ママ}さい方に陣取ることになりました。

私の部屋の土間に木炭をドシドシ焚かせて二人は寝るまでは、そこで談ずることに決めました。彼女は自ら食物を拵へて、食べさせて呉れた。木炭の燃ゆる傍で、いろんな話を喋合つたのですが、それはかなり更けてからでありました。彼女は自らの生立の物語を打明けました。私が上手にたぐり出すものですから、問はれるに連れて、生立の物語を打明けて仕舞つたのです。

——鈴蘭はどうして、お嫁入せなかつたのだ……

——それにはちよいと訳があるの、そんな話を聞いて、怎うするの……

——怎うする訳でもないが、面白いぢやないの……僕そうした話を聞くのが大好きだ……

——それはあたしの小さい時からの話をせねばならぬわ……するかなあ、一寸長くてもいゝ……だいぶ遅いぢやないの……手取早く、搔つまんで話せつて……六ヶ敷しい。

……あたしにはいゝお父さまがあるの、それは今の支那で持ち得る父親として、この上もない上等なものでせう。父はやつぱり米国人から教育を受けました。ですからそれはそれはリベラルな人物ですよ、でも只一つ堅い堅い頑固なものがあるの、それはお酒に対する強烈な嫌悪なのです。何といつてもお酒は絶対に飲まない。子供にも飲ませないのです。あらゆる自由を主張し、与へる人であり乍ら、酒に対しては一步も半歩も譲らないんです。あたしは曾て恋したことがあるわ。……ある写真屋の息子と恋したの。その息子は文学をやるのよ……でもお酒飲ですわ……父がいふんです。お酒飲のところへは決して嫁入らせないつて、……あたしはその頃十七だか十八でしたが、随分苦しんだの。その後いろんな男と知合ふ機会があつたけれども、相手の男がだいぶ熟して来たと思ふ頃には、屹度あたしが冷たくなるの。……支那ではまだまだ男女が知合ふ機会が少いから、大抵の男は少し交際してやると、直ぐラブして来るわ、もういやになつてしまふ。あたし随分どつさり、男の手紙を持つてゐる。どの男もどの男も同じやうなセリフで、やつてのけるのね。もうあたしは駄目。人が熟して呉るとそつと第三者であるかのやうに、一步も二歩も引下つて、ちつと嗤つてゐるんですもの……こうした心持あなたは解つて……

——解らんこともないよ……

——そう、あたしこの頃もう恋にあきた。……もういわないことよ……ぢや、おやすみ、さああたしのお部屋に帰ります。さやうなら、明日の朝までごきげんやう……

彼女は問はれるまゝに、ベラベラ喋つて仕舞ふた。その話振に依ると何度も何度も曾て喋られたかのやうにかなり上手に語られた。彼女は自分の部屋で、何だかごそごそやつてゐる。床を取つてゐるのであらう。私はぢつと赤い炭火を見詰めたまゝ、もぢつともせずに、女の話したことをもう一ぺん考へて見てました。

もう一時だ。私はふと時計を出して見て眠らねばならぬと感じました。眠る時にはバイブルを^{ママ}視いて、お祈をして床に入るのが私の幼い時から習慣であつた。この日私はバイブルを覗く気にも、祈る心持にもならなかつた。そうして床の中に藻繰込んで、女、恋、肉、いろんな主題に、考へさせられてゐた。そうして鈴蘭を中心に、想ひがぐるぐる廻つて歩きました。隣の部屋も

ごそごそ音立て、時々何かしら独語をぶつぶついつてゐる。

私は一旦寝たものの、^{ママ}バイブルを覗いて居ないにがどうも気持を眠る段取にせぬ。気持がすすまぬ。遂々手を伸べて、バイブルを服のポケットから引出して覗いて見た。極ぐ意味ののいどつかの一行を読んで私は再び蒲団にくるまつた〔。〕そうすることが私にとって一種のまじないであるかの如く効験を呈して、うとうと眠気がさして来ました。

ふと物におびえたやうに、目を醒した時に木炭の燃残に両手をあぶつて、彼女が躑ぶつてゐた。桃色の肌襦袢とパンツだけを身に纏ふてゐる。肩から袖を通さないで、私のオーバーを脊負込んでゐる。白い獣のやうな足が赤く火つてゐる。

——あたしの部屋はそれはそれは寒い。……火の傍に限るわ……何といつても……もういゝ加減に寝なくつちや……

——本当に眠るわ……

彼女は外套を私の上にふわりつと懸けた。そうして私の部屋の出口まで行つて、再び戻つて、一分ばかりちつと立つてゐた。何をしようかと思つてると、彼女は突如私の衾の中に藻艸込んで来た。

私は洋服を着たまゝ、寝て居つたのです。それは私が支那宿に泊る時の習慣です。到底支那のせんべ蒲団では、寒くつて洋服等脱いで眠れるものではないんです。

——許るしてくださるでせう……ねえ……あたし餓えてゐるの……

彼女は私の首を抱くべく、曾て日光に当つたことのない白ろいそうして、肉着のぼたぼたせる腕を差し伸べました〔。〕私はがばつとはね起きました。何故にそうしたか、何と思つてそうしたか、それは無意識でした。兎に角一瞬の事実として、私は立上つてゐました。彼女はひゝゝと恰も毒婦が嗤ふやうに笑つて、次の瞬間にわつと泣き出しました。私は外に出た。靴下のまゝで出ました。

それも何と思つて、やり出したのか解らないのですが、私は左の手を、ステッキで擲つてゐました。ずつと後になつてから、解つたのですが、私の手首からは血潮が滴り落ちてゐました。腕の内側は一面に黒く血沁じんで、漲れてゐました。

女は自分の部屋へ逃れ帰りました。明ける頃、私は手の痛みをずきずきと感じました。そうして私は怖しき夜の明けたことを喜びました。

帰途は二人で殆んど喋らないで、双方で気まづい思ひして汽車に乗つてゐました。

（了）

【附記】誤記等に気付かれた方々、あるいは本稿で紹介した史料の現物（複写物）を閲覧したい利用者諸賢は、編者まで連絡されたい。（E-mail: kanemaru@ec.ritsumeai.ac.jp）